

# 家庭学習応援だより

## 第1号

明日は、授業参観、学級懇談がございます。新しい学級でのお子様の様子をぜひご覧ください。大洋小学校2年目がスタートしました。今年度も前年度に引き続き、よろしくお願いいたします。

2年目ですから、なるべく前年度と同じ記事にならないようにしていこうと考えています。1年目のお便りも読みたかったという方は、本校 HP に「家庭学習応援だより」のリンクにバックナンバーを載せておきますので、こちらをご覧ください。今年度は、毎月下旬ごろに発行しようと思います。

さて、このお便りを初めてお読みになる新入児童の保護者の皆様、学校と家庭が手を取り合って、子どもの確かな学力を育成することはとても大切です。子どもたちの学力を向上させるためには、授業で学習したことと関連付けながら家庭学習をすること、またそれを習慣化することが大切です。「**子どもの意欲と学習習慣**」、「**家庭の理解と協力**」、「**教師の指導力と熱意**」の3つの柱が学力向上のポイントだと言われています。保護者の皆様には「**家庭の理解と協力**」の部分ぜひご理解いただければと思います。



## 勉強を科学する

今年度の始めは、本校図書室においてある保護者用の書籍からお伝えしていこうと思います。習慣を変えることはとても難しいことです。昨年度の1年間、家庭での学習がいかに子どもの学力を伸ばすか、また、子どもの能力を伸ばすためには親の関わりや子供との距離感が大切だとも述べてきましたが、皆様のご家庭では学習の習慣がしっかり身に付いたでしょうか。ここでは「小学生の勉強は習慣が9割」(菊池洋匡 SB クリエイティブ)から紹介します。本書のすべては紹介しきれないのでさわりの部分だけにして、それ以上のことがお知りになりたければ、図書室でお借りいただければと思います。

まず、子どもの勉強について以下の保護者の考え方は間違いで、残念ながらほとんどの場合はそうならないと著者は述べています。

- 目標があれば、子どもは積極的に勉強する。
- やる気や根気があれば、勉強にコツコツ取り組める。
- 学年が上がれば、自覚が芽生えて勉強するようになる。



これらの失敗の原因は、「習慣のメカニズムを知らない」ことによるもので、そもそも人間の脳は「現状維持」を好むため勉強の習慣がなければ、勉強を習慣にするという「変化」を嫌うようになる仕組みになっているからだと思います。そのため、「好ましい(勉強をする)習慣を身に付ける」にはコツがあり、それが以下にある通りです。

- ◇ やる気のスイッチを作る「If-then プランニング」
- ◇ 行動のリピート率を高める「即時報酬」
- ◇ 目的達成の邪魔になる「誘惑との戦い方」
- ◇ 習慣化を加速させる「頻度」
- ◇ 自己コントロール力を高める「2つの感情」
- ◇ 達成を引き寄せる目標の立て方「5つのルール」



これらの言葉だけではわからないことも多いでしょうから、昨年1年間では家庭学習の習慣が身に付かなかった、コツコツやるのが苦手だと思いの方は、本書でお確かめください。どの“how to”ものでも言えることですが、これがすべて正しいというわけではありません。ただ、確かな学力の定着のためには、家庭学習の習慣化は絶対に欠かせません。これを一つのきっかけにしてもらえればと思います。

## 量なのか、質なのか



よく学習や勉強で取り上げられる二項対立の問題ですが、保護者の皆様はどう思われますか。東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は、全国の小中高生に学習状況の変化などを訪ねた2022年調査の結果を発表しました。前年より成績が伸びた子供は、工夫を重ねて上手な勉強法を身に付ける傾向がある一方、勉強時間の長さは成績との相関が弱かったということが分かったそうです。研究チームは「やみくもに時間をかけるより、勉強法を身に付けるほうが成績向上の早道と言えそうだ」と指摘しています。

勉強法の理解度が高い、あるいは成績上位の子どもほど、そうでない子どもたちよりも20ポイント前後、様々な勉強法を試していたことが分かったそうです。学校でも「学び方を学ぶ」「子どもが課題に対して試行錯誤する」場や機会は非常に大切だと捉えており、そのための学習指導について研修しているところです。また、成績上位の子どもは「論理的に考えることが得意」「一度決めたことは最後までやり遂げる」傾向が高く、「子供が工夫し、メタ認知(自分を俯瞰してみる)を働かせながら学びを組み立てられるよう学校や家庭で指導できるといい」とのことです。

確かに、宿題を例に考えてみると、宿題は一齐に一律に出されるので、学習の質まで均一だと思われがちですが、家庭によって、あるいは、子どもによってやり方は様々なのは、私が担任の時代に感じたことです。例えば、漢字や計算ドリルが宿題だとして、問題は解いたが丸つけをしない子、問題を解いて丸つけまでしてくる子、問題を解いて丸つけしてさらに間違いを直ししてくる子、どの子が力を伸ばしていくのかは、おわかりだと思います。宿題の量はどの子に対して一定でも差が出てくるのは、きっとこうしたことなのかなと思いました。

## 低学年の時期の体験がとても大切



低学年の時期に自分の目で見て、手で触れ、五感を使って体験し、様々な気付きを引き出すことが大切です。その気付きは、科学の目を育て、自分自身の生活について考えるきっかけになるとともに、学びたいという気持ちを育てます。

ここ10年くらいで、社会の変化は激しく、便利で豊かになる中で、子どもたちの日常の過ごし方も変わってきました。例えば、外遊びが減り体を動かさない。ゲームの画面越しに友達とコミュニケーションできる。地域行事の減少は人と触れ合わない場の増加。人と話さなくても買い物ができる社会など、人や社会と関わる体験の場が失われています。子どもたちの日常の遊びや生活の場で得られる学びの場がなくなってきています。では、今子どもたちにはどのような体験の場が必要なのでしょう。下記に挙げる6つが大切だと言われています。

- 友達との遊び
- 家族行事
- 家事手伝い
- 動植物の世話体験
- 地域の人との関わり
- 自然体験



遊びは一見学習と相反するもののように感じますが、子どものころの様々な体験が豊富な人ほど、大人になってからのやる気や生きがい、モラルや人間関係などの資質・能力が高くなる傾向があるようです。また、自然体験がある子どものほうが学力テストの平均正答率が高いという結果も出ています。

おわりに

本お便りでは、子どもの学力向上、家庭での学習の習慣化のための情報を掲載していきます。お子様の学習で気になること、また、子育てなどで悩んでいることがあれば、遠慮せず学校までお問い合わせください。